



ippō (いっぽ)

秋田県立支援学校
天王みどり学園
研究だより第5号
令和8年1月28日発行

〈研究主題〉 児童生徒の学びをつなぐ授業づくり ～児童生徒の「思い」や「願い」を踏まえて（1年次/2年計画）～

本研究では、児童生徒一人一人の「思い」や「願い」を踏まえ、教科等の視点から「何を学ぶか」を整理し、学習評価の視点から「何ができるようになるか」を明確にして、児童生徒の学びをつなぐ授業づくりに取り組んでいます。今回は、高等部の全校授業研究会について紹介します。

● ● ● 高等部3年職業Bグループ 職業科「夢の実現に向けて」

授業について

生徒たちは、現場実習の評価やキャリアノートを活用し、自分の強みや課題を理解しているが、その課題をどう解決すればよいか分からないといった実態がある。そこで、マンダラチャートを活用し、友達や教師と課題解決のに向けた意見交換することで、やるべきことを具体化し、自らの考えを深め、「これをやる」という意思形成を図りたいと考え、本題材を設定した。

抽出生徒Cについて

これまでの学習から、自分の強みや課題を理解している。自分の課題について自分なりに対応しようとしているが、相談することを苦手としている。現場実習の事前挨拶で一言も話せずに過ごしたこともあった。

本題材に取り組み始めた頃は、なかなか自分の考えを話すことができなかった。しかし友達とのやりとりを繰り返したり、自分の考えが受け入れられたりする経験を通して、考えていることを伝えられるようになってきた。



授業研究会から

授業研究会では、参観者が見取った抽出生徒の言動を基に、互いの解釈を共有し合って、「次につながるキーワード」をまとめます。また、授業全体を通して学びをつなぐために有効だった手立てと、今後の授業等につなぐ意見交換を行います。 ※以下各グループのワークショップからの抜粋

○「次につながるキーワード」

- ・ 実践による経験の積み重ねと振り返り
- ・ 場面を具体的にイメージできる工夫
- ・ 生徒の実態に合ったアプローチの工夫
- ・ 課題の絞り込み
- ・ 活動への見通しと自信をもって取り組める活動の設定

○「学びをつなぐために有効だった手立てと今後の授業につなぐキーワード」

- ・ 思考するだけの活動にとどめず、実践的な活動をつなげる
- ・ 話しやすい雰囲気づくり、安心できるグルーピングの工夫
- ・ マンダラチャート等による思考ツールによる思考の可視化
- ・ 「自分ならどうする?」「こんなときどうする?」等、自分事として考えられるような問い掛けの工夫
- ・ ICT機器の活用



【指導助言】 秋田県総合教育センター支援チーム 指導主事 進藤拓歩氏

○本時の授業について

生徒たちは安心感をもって学習に取り組んでいた。協議では、1年生当時と比べて想像以上に成長しているという声が聞かれた。マンダラチャートを用いて思考を可視化する工夫や、4ますに絞って考えやすくした点が効果的であった。「職場で信用される」をテーマに、イラストやロールプレイを取り入れ、実体験に基づいて理解を深めていた。発表で使用した話し方のテンプレートは、卒業後の自立した生活にも活用できる有効な工夫であったと感じた。

○授業改善に向けて

・話し合い活動について

話し合いは一問一答形式に近く、即答が難しい生徒にとって負担になるのではないかと感じた。まず書く時間を確保し、その後に話すというワンクッションを置くことで、自分の考えを整理し、安心して発言しやすくなる。書くことが難しい場合は、選択肢形式やテンプレート、ICT の活用も有効である。

・マンダラチャートの使い方について

マンダラチャートは具体的に書くことが基本であり、「(ぐ) 具体的に、(た) 達成可能な目標設定、(い) 意欲がもてる、(て) 定量化する、(き) 期日を決める、(に) 日課にする」を意識することで、達成可能で意欲につながる目標設定が図りやすくなる。

・選んだ理由の見える化

授業の終末部分で、生徒が一つの意見を選ぶ際に、それまでの話し合いを踏まえていたかどうかを見極めたい。例えば、複数の意見が書かれた付箋紙から一枚選ぶ際に、生徒が付箋紙を見比べているかどうかを見るなど、生徒の判断のプロセスを評価できるような工夫があればよいのではないかな。

○肯定的な自己理解とキャリア教育との関連について

本授業で扱った自己理解は、職業科に限らず学校の教育活動全体を通して行うキャリア教育と深く関わり、特に特別活動が中心的役割を担う。キャリアノートは日常的に活用し、振り返りを積み重ねることで、自己理解につながる。生徒が自分の苦手さを理解するとともに、「できるようになりたいこと」や「工夫すればできること」を生徒と教師と一緒に考えてほしい。卒業を控える3年生にとって一人一人の力や経験の積み重ねを私たち教師が支えていく必要があると改めて考えさせられた。

授業研究会後の授業から（授業へのフィードバックと生徒の変容）

○場面を具体的にイメージできる工夫

Cが自分事として捉えられるように、日常生活の課題場면을教材として提示した。その結果、生徒は「自分ならどうするか」という当事者意識をもつとともに、「○○君にはこの方法が有効ではないか」と、友達立場になって考え、解決策を提案する姿が見られた。特に、友達との対話を通して得られた客観的な視点は、Cにとって新たな気付きになり、自らの課題を再定義し、実行可能な解決策を選択するためのよいきっかけになった。



友達との協同的な学びを通して、どうすればよいかを自分で考え、自分なりの解決策を見付けられたことは大きな前進であった。

○活動への見通しと自信をもって取り組める活動の設定

Cの課題の一つに、一人で買い物に出掛けることも挙がっていた。「買い物」は、普段の生活の中で保護者と一緒に出掛けたり、授業の中でも繰り返し経験を積んだりしている見通しのもてる活動である。今後、一人で買い物に出掛けるためにはどのようにすればよいか、また、一人で買い物をする際に何が難しく、何が不安なのかといった課題の整理を行った。

「前は近所のコンビニに欲しい本が売っていたんだけど、今は売っていない…」という発言をきっかけに、休みの日に欲しい本を一人で買いに行くことを目標とし、その課題解決の方法を探った。

まず、別のコンビニや書店に行くことを考えたが、家の近所にはコンビニや書店がなく、電車を使って出掛ける必要があることが分かった。そのことを考えていく中で、以前に保護者と一緒に立ち寄った隣の駅前のコンビニのことを思い出し、そこに一人で行ってみようという気持ちが芽生えた。また、友達とのやりとりをする中で、いつもの通学路とは反対の方向にも別のコンビニがあることを思い出し、そこに歩いて行くことも可能であるということに気付いた。

課題を自分事として考え、課題を細分化していく中で、これまで経験した様々な出来事がつながったり、「できるかもしれない」という自信になったりして自分でやってみようとする気持ちの変容が見られた。